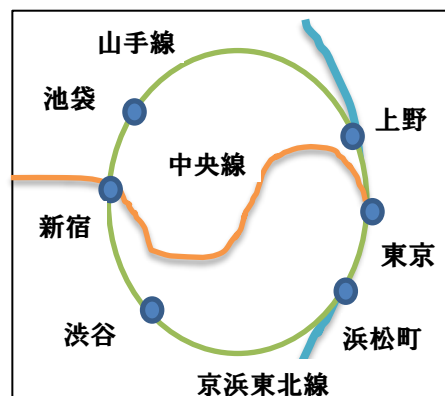


## 江戸と東京

私が最初に勤めた学校は、横浜市内にあったので、1年生の遠足では「東京社会見学」が定番でした。初めて担任したクラスは、JRの浜松町駅に集合して、日の出棧橋から遊覧船にのり、築地や佃島などのそばを通過して隅田川をさかのぼり、浅草で下船、そこから地下鉄銀座線で上野に出て、上野動物園や国立博物館などを見学して解散というコースでした。

このように書くと何ともないですが、1872（明治5）年に開通した日本最初の鉄道のこと、築地市場（最近豊洲に移転しましたが）や佃煮のこと、浅草の商店街や浅草寺の由来、そして日本最初の地下鉄である銀座線（1927（昭和2）年開通）のこと、幕末の上野での彰義隊の闘いやそれで焼け野原になった上野で1877（明治10）年に内国勸業博覧会が開かれ、その跡地が動物園や博物館などになったことなど、事前学習や事後学習でやる内容はたくさんありました。



当時私が参考にした本に、陣内秀信さんの「東京の空間人類学」（ちくま学芸文庫）があります。東京の都市構造の中に、江戸時代のなごりを見つけ、都市の中に縦横に河川と水路で結ばれた水運網があったことを私たちにわかるように書いた本で、「江戸がイタリアのベネチアに匹敵する水の都」であったことを知りました。日の出棧橋から隅田川を上る遊覧船にこだわったのも、そのあたりに理由があったのです。

ある年の遠足は、学年で統一して東京班別自由行動ということになり、自分たちでコースをつくって、最後は横浜に戻ってくるということにしました。隣のクラスの先生がLHRで、「山手線は緑、中央線はオレンジ、京浜東北線は青だぞ！」と大声で生徒に話していましたが、迷子になる班はありませんでした。ちなみに、東京のJR線は上の図のような形で走っています。

さて、江戸という地名の由来について少し書いてみましょう。諸説あるのですが、江は川、戸は入口ということから川の入口（もしくは入江）というのが有力です。東京駅の西側の日比谷というところは、かつて海が入り込んだ場所になっていたことがわかっており、そのあたりが江戸の地名の起こりのようです。（アイヌ語のエト（＝岬）という説もあります。）

人文社から出ている「江戸東京散歩」という本では、江戸時代の切絵図と現代の地図を見開きに掲載してあって、「このあたりは昔は〇〇藩の上屋敷だった」とか、「このあたりに〇〇が住んでいた」などの情報が一目で読み取れます。一般的に言って、江戸時代の大名の屋敷があったところは、東京になってから官公署やホテル、皇族、華族、財閥家の邸宅などに転用されて、江戸時代の地割がそのまま生かされています。一方、谷あいや川沿いの低地など、もともと町人や下級武士の住居があったところは、商店街や町工場と住居が混在する市街地となりました。江戸と東京の連続性について書いた本はたくさんありますし、墨田区の両国駅近くには、その名もずばり「江戸東京博物館」という立派な博物館もあります。

みなさんにとっては、東京というと繁華街の渋谷、新宿、池袋、原宿などが思い浮かぶかもしれませんが、これらの場所は、江戸時代には大名屋敷がぽつぽつとある以外は、田畑の広がる農村地帯で、新宿だけは甲州街道の宿場としての賑わいがありましたが、当時の江戸の繁華街といえ、浅草や日本橋などいわゆる「下町（したまち）」と呼ばれていたところでした。

明治時代になり、日本の首都となって江戸から東京になります。もともと大名屋敷が多かった台地の上（いわゆる「山の手」）に市街地が拡大し、その中に鉄道や路面電車が走るようになり、道路が整備されていきます。現在の山手線の原型となる鉄道の駅から、郊外に伸びる私鉄が建設されて、そのターミナル駅となった渋谷（東急線）、新宿（小田急線）、池袋（西武線）などが発展していきます。

第2次世界大戦後は、路面電車（市電）の路線が地下鉄やバスにかわっていき、道路上の主役は圧倒的に自動車となりました。さらに1964（昭和39）年の東京オリンピック開催に合わせて首都高速道路網の整備が急ピッチで進められましたが、このときに市内を流れていた河川の上や川岸の一部が高速道路用地となったために、かつての水の都の景色は、高速道路網の中に消えていきました。江戸時代の東海道の起点であった「日本橋」上に首都高速道路がクジラのおなかのように覆いかぶさっている写真は有名ですよ。

また、江戸時代から湾岸の埋め立ては行われていましたが、東京となってからはさらにその勢いは加速し、ごみ処分場や工場用地などに利用されたのち、現在はテーマパークやスポーツ施設など建設されるなど臨海副都心が形成されています。

江戸から東京へと時代が進む中で、この都市は水平方向に大きく発展するとともに、垂直方向にも発展しました。高層ビルやタワーが上にのび、高速道路網が重層的に発達するとともに、地下街ができ、地下鉄が縦横に交差して走っています。平面的な土地利用には限界があるので、こうして垂直方向の土地利用が行われるようになるのです。

さて、東京全体の話はこれくらいにして、最後に個人的な東京体験について書きたいと思います。校長になってから仕事で東京に行くことが何度かあり、久しぶりに新宿や渋谷の街を歩きました。高校生の頃には新宿駅前のロータリーの雑踏はとてつもない人の数に見え、渋谷駅前のスクランブル交差点から見える公園通りのショッピングストリートは、何か輝いて見えました。お茶の水の古書店街や楽器店からは、身近で感じるものの出来ない文化の香りが漂って来ました。

しかし、40年近く経って同じ場所からの景色は、ずっとスケールが小さく見え、郊外の都市に一般的に見られるような量販店の看板が目立って、なんだか東京の街らしさがなくなってきたように思いました。ワクワクしないのです。中学生だった娘たちに頼まれて、10年前に原宿の竹下通りに久しぶりにいった時も、同じ感想を持ったことを思い出します。昔は東京の街の中で、体も心も解放されたような感じがしたのに、今はあまりときめかないのは、やはり年をとったからなのでしょう。

とはいえ、東京は若いみなさんにとっては、やはり刺激的でワクワクする場所だと思います。今はネットで何でも調べられる時代ですから、訪れた東京の場所の歴史を探ってみると面白いと思います。東京は、何層にもわたって歴史が積み重なっている、調べ甲斐のある都市であることは間違いありません。